

Eloisa と Belinda の相違

石川 郁二

I

Alexander Pope の *Eloisa to Abelard* と *The Rape of the Lock* は作品の内容からいってほとんど類似点がないように思える。*Eloisa to Abelard* は Abelard によせる Eloisa の苦悩に満ちた恋愛を題材にし、*The Rape of the Lock* はその題が示すように Belinda の美しい髪の手製の略奪が題材になっている。しかし、この両作品はどちらも女性が主人公である。題材の違いから異質の面も多分にあると思われるが、その女性の描き方にはどこか共通のものがあるはずである。そして、この2人の女性には明確に違うものもあるだろう。この小論は Eloisa と Belinda の相違を論じたものである。

II

Eloisa to Abelard は Abelard に対する Eloisa の恋慕の情を描いたものである。作品の概略をまず述べておきたい。

Eloisa は女子修道院で修道女としての生活を過ごしている。しかし、神に仕える身でありながら Abelard を慕い千々に心が乱れる。女子修道院での厳しい生活にもかかわらず、Eloisa は自分の心がまだ石になりきっていないことに気付く。Abelard からの手紙を読み出すと、すぐにため息が出、涙を催す。世俗的な欲望のすべてを消す為の女子修道院において Eloisa は Abelard への愛に

震えている。彼の手紙を涙とため息で読むことだけが、今の Eloisa に出来る唯一のものである。女子修道院にいる Eloisa の手元に Abelard の手紙が届き、その手紙が今まで心の中に押さえられていた Eloisa の愛に火を付ける。

59行から Abelard と初めて会った時の Eloisa の回想が描写されている。Eloisa はその時 Abelard を理想的な男性と思い、Abelard に恋した。Abelard の微笑む眼、心を酔わせる甘美な歌、そして彼の言葉を思い出す。Eloisa は神を捨てても Abelard をと望んだ。それも人間、五体を持っている Abelard を望んだのだ。結婚について考えると、Eloisa には愛によって作られていないすべての掟を呪うのが常であった。愛の神は男女の絆を見たとすぐに火を付ける。愛に比べれば他の世俗的なものは問題ではない。神の厳しい試練を冒瀆すると、その報いとして神は我々の中の情念を燃え上がらせる。愛する人の妻になることは、他のどんな偉大な名誉と比べても、比較にはならない。もしこの世に天上の喜びがあるのならば、以前の Abelard と Eloisa の関係がそうであった。2人の仲は引き離される。Eloisa はその時のことを羞恥心と憤怒で述べることが出来ない。

この世俗の世界と別れを告げた日のことを Eloisa は思い出す。宗教生活を誓った時でも Eloisa は Abelard への思いを断ち切れなかった。Eloisa にとって Abelard の愛を失うことは自分のすべてを失うことと同じである。彼女に必要なものは神の恵みよりも Abelard の愛である。しかし突然 Eloisa は Abelard への思いを捨て、神への愛を体一杯に満たさなければならないと思う。神に仕える為に Abelard を諦めさせてくれるようにと祈る。

しかし、Abelard の思いがなければ Eloisa にとって女子修道院はうら寂しい所である。光明のない憂うつが支配しているのみである。それはすべての景色を悲しみに沈ませるものである。Eloisa は女子修道院に死ぬまで止どまらなければならない。死だけが Eloisa の誓った不変の誓いを破ることが出来るのだ。

神に助けを求める Eloisa には、それが敬神の心からか、絶望からのことなのか分からない。女子修道院にいる Eloisa は「愛」というものが罪だとは思

が、Abelard という人間を愛している自分をどうすることも出来ない。Eloisa の迷いは続く。神への愛と人間への愛とで苦しみ迷う。だが Eloisa は Abelard への愛に溺れた心を捨てて、神への愛だけに生きようとする。

Eloisa は清廉潔白な Vestal のことを考え羨ましく思う。彼女の祈りはすべて神に届き、彼女の為にエデンの園の花はひらく。彼女が死ぬ時には天上のハーブが演奏される。

しかし Eloisa はそうではない。女子修道院での1日のお勤めが終ると Abelard が彼女の心の中に現われる。悪魔が彼女の心の抑制をすべて取り除き、愛の感情が心に沸き上がってくる。目覚めると Abelard の幻はもう消え去り、声も聞こえない。突然 Abelard が空から Eloisa を手招きするように思えるが、雲が遮り、波がごうごうと鳴りさわぎ、風が起こってしまう。

Eloisa は悶え苦しんでいるが Abelard には騒ぐ鼓動も、燃える血潮もない。Eloisa は Abelard に自分の所へ現われよと言う。Abelard への愛は女子修道院のお勤めの時にも Eloisa の心を悩ますようになる。Eloisa は Abelard に自分を奪ってくれるように頼む。しかし Eloisa は Abelard が自分と同じ苦悩を持つことは望まない。自分から遠く離れて、自分を忘れてくれることを望む。

小さな独居室の中にいる Eloisa は精霊が自分を呼んでいるように感じる。その精霊は生きていた時、Eloisa と同じように愛の犠牲者であった。Eloisa は「死」について幻想する。Eloisa の前に Abelard が十字架を差し出す。死ぬ時は自分を見ても罪ではなくなるのだと Eloisa は思う。

最後に Eloisa は Abelard と同じ墓に入ることを望む。自分が死んだ後、Abelard と一緒になることを。そして将来、詩人が自分達のことを聞き、それを歌うことを望む。

Pope はこの作品では初めから終わりまで Eloisa の心の状態を主に描写している。作品の主題は、作品に付加されている“The Argument”に述べられている。

It was many years after this separation, that a letter of Abelard's

to a Friend which contain'd the history of his misfortune, fell into the hands of Eloisa. This awakening all her tenderness, occasion'd those celebrated letters (out of which the following is partly extracted) which give so lively a picture of the struggles of grace and nature, virtue and passion.¹⁾

神の恩寵と人間の本性²⁾との葛藤，そして節操と愛の激情との葛藤が作品全体に流れる主題である。Eloisa は神への義務と Abelard への愛との狭間に苦悩し，嘆き悲しむ。Abelard との愛を激しく求めると共に，それを押えようとする心が働く。

神への義務，神への愛は作品の中でどのように表わされているのだろうか。それは Abelard のことを思った直後に描写されている。それは神のことを思い，女子修道院生活を過ごしていくにつれて Eloisa の敬神がつのるという描写にはなっていない。Abelard を愛する故に，その愛への罪悪感から神のことを思い，苦悩からの救いとして神を思っているのである。

Still on that breast enamour'd let me lie,
 Still drink delicious poison from thy eye,
 Pant on thy lip, and to thy heart be prest;
 Give all thou canst—and let me dream the rest.
 Ah no! instruct me other joys to prize,
 With other beauties charm my partial eyes,
 Full in my view set all the bright abode,
 And make my soul quit *Abelard* for God. (121—8)

神への従順を誓う Eloisa の心には Abelard が表裏一体となっている。Abelard のことを忘れようとするれば，その空虚になった Eloisa の心を満たすものは神以外にはないと Eloisa は自身知っている。

Oh come! oh teach me nature to subdue,
 Renounce my love, my life, my self—and you.
 Fill my fond heart with God alone, for he

Alone can rival, can succeed to thee. (203—6)

このような Eloisa の心には女子修道院にいるということが常に頭にあるのだろう。世俗的なものをすべて捨て去らねばならない厳粛な場所に自分がいることが、Eloisa の心をますます苦しめることになるのだ³⁾。そこには社会の慣習的な約束がある。修道院の戒律がある。この作品は1つの足枷として女子修道院というものがあり、その抑圧がこの悲劇を生んでいる1つの大きな背景となって、効果的に作用している。

この女子修道院生活に Eloisa は素直に心から従えない。Eloisa は自分を捕われの身であると思っている (1. 52)。女子修道院生活に入る時の Eloisa にはまだ Abelard の面影が色濃く残っている。宗教生活を誓いながらも、Eloisa の視線は十字架の上ではなく、Abelard の上に注がれている (1. 116)。Eloisa は女子修道院生活の厳しさに耐え切れなくなり、Abelard へと心が動いていった訳ではない。Eloisa の心には Abelard が常に存在し、その思いを断ち切ることが出来ないのである。修道院生活からの、厳しさからの逃避ではない。Eloisa は自分の心に忠実なのであり、自分の生きる道を積極的に捜し求めているのである。Eloisa の心の底には Abelard への思いが秘められており、女子修道院生活に全面的に浸り、すべてを忘れることが出来ないのである。

Shrines! where their vigils pale-ey'd virgins keep,

And pitying saints, whose statues learn to weep!

Tho' cold like you, unmov'd, and silent grown,

I have not yet forgot my self to stone.

All is not Heav'n's while *Abelard* has part,

Still rebel nature holds out half my heart;

Nor pray'rs nor fasts its stubborn pulse restrain,

Nor tears, for ages, taught to flow in vain.

(21—8)

Abelard への思いは、前出の作品概要にあるように、至る所で描写されている。Eloisa の心の中の Abelard は徐々に大きく膨れ上がり、その思いに Eloisa は苦悩する⁴⁾。自分の愛情を秘密にし、心の奥底に大切にしまっておきたいと思

っても、自然にその名前が頭に浮かび、知らず知らずに Abelard の名前を Eloisa は書いてしまう。Abelard の手紙の中に自分の名前を見付け出すと Eloisa の体は震えてしまう。

Abelard に初めて会った時のことを回想する Eloisa は喜びに溢れる。Eloisa は Abelard を天使のように幻想するが、生身を持つ Abelard を望み、Abelard の為を失っても悔いがないと思う。Eloisa は Abelard の妻になりたいと望む。そして相思相愛の時の 2 人は天上の喜びが地上で実現したかのようである。その時の 2 人には何ものにも束縛されない自由がある。

Oh happy state! when souls each other draw,
 When love is liberty, and nature, law :
 All then is full, possessing, and possest,
 No craving Void left aking in the breast :
 Ev'n thought meets thought ere from the lips it part,
 And each warm wish springs mutual from the heart.
 This sure is bliss (if bliss on earth there be)
 And once the lot of *Abelard* and me. (91—8)

この時の Eloisa には今の苦悩はない。恋する女性の幸せが十分に感じられる箇所である。

Abelard への愛は作品が進むにつれて Eloisa の心の中で高まって行く。1 日のお勤めが終り自分 1 人になると、Eloisa の心は解き放たれる。悪魔がすべての抑制を取り除くのだ。Eloisa の心は掻き乱れる。それが高じると、お勤めの間にも Abelard のことを思うようになる。朝のお祈り、賛美歌の時、Eloisa の魂は Abelard への愛の炎の海の中で溺れてしまう。最後には Abelard に向かい、悪魔に手を貸して自分を神から引き離してくれるように頼む所まで行ってしまふ (I. 287—8)。女子修道院にいる Eloisa が神にではなく悪魔の力を頼む、という不敬の行為に出るほど Eloisa の思いは強くなる⁵⁾。

Eloisa の愛は積極的なものである。時に、神に対し救いを求めることもあるが、自分の愛に対しては神をも捨て去ってしまう。神への賞賛の音が響く女子

修道院に生活し、その厳しい戒律の中で、Eloisa は Abelard を求め続け、理性を失って行く⁶⁾。

積極的に強いばかりかというところでもない。女性の脆さ、優しさも Eloisa は持っており、Abelard への一途な愛の中で消極的な迷いが感じられる。Vestal の幸せな運命を自分の運命と比べている箇所は彼女の羨望が感じられる。人間への愛にではなく神への愛に生きたその人には、今の自分の苦悩はなかったと Eloisa には思われる。しかしここで Eloisa はその人の一生を羨ましがっているとすると、自分もそのような一生を過ごしたいと本当に考えるのだろうか。

この描写のすぐ後に Eloisa は Abelard の夢を見る。目が覚めるとその姿は跡形もなく消えてしまう。そして Eloisa はもう一度 Abelard を見たいと両目を閉じるのである。

I wake—no more I hear, no more I view,
The phantom flies me, as unkind as you,
I call aloud; it hears not what I say;
I stretch my empty arms; it glides away :
To dream once more I close my willing eyes;
Ye soft illusions, dear deceits, arise !

(235—40)

Abelard への思いを断ち切ってまでも Vestal と同じような一生を、と願っているとは思えない。あくまでも Abelard への愛に生きたいという女心が感じられる。Eloisa にとっては神にも代え難い Abelard であるのだから。しかし、この描写には女性としての脆さが見えるのである。Eloisa の思いが少し立ち止まり、理性が顔を覗かせているのだ。

Eloisa の優しさは Abelard への願いの中に見い出される。Eloisa は自分の苦悩を Abelard に分ち持ってもらいたくないと思っている。神聖な衣服を着て立っている Abelard には平安があり安らぎがある。その Abelard の心を乱したくないと思う Eloisa は、自分に近寄らないで遠く離れていて、と Abelard に頼んでいる。Eloisa は愛する人の為にはいくらかでも優しくなれるのである。そしてそれがまた、Eloisa の迷いにもなっている。

「死」はこの作品の結末に主要な役割を果たしている。Eloisa の死に対する態度を考えてみよう。大きく見れば女子修道院へ入ること自体が世俗からの死にほかならない。その時の Eloisa の心には Abelard がいる。死に関しての描写を考える時、Eloisa は必ず Abelard との結びつきにおいて死を考えている。

死後の世界は Eloisa にとって花の咲く所であり、苦悩する心が救われ、神に許される所である。かつての愛の犠牲者であった精霊が Eloisa に呼びかける言葉の中にそれが表わされている。これは一種の Eloisa の幻想である。その幻想の中に Eloisa の心が表われている。

ここで Pope は最後の結末を暗示している。死は神の国であり、神は “our frailties” (1.316)⁷⁾ を許してくれるのである。しかし、Eloisa にとっての死とは、すべてを捨てさって神の下へ行くということではなかった。神の許しを得て心の平穏が得られる所ではあるが、Eloisa が死ぬ時、そこには Abelard がいるのである。この世で添い遂げることが出来ない愛をあの世で実現させようと Eloisa は思っているのである。死の世界は、世俗の煩しき、女子修道院の戒律、肉体的な欲望等のすべてと縁の切れる所であるのだ。Eloisa の目の前に十字架を差し出すのは Abelard であり、その時はお互いに見詰め合っても罪にはならない世界なのである。

Abelard と同じ墓に入ることを希望する Eloisa には死も積極的に迎え入れる心の準備が出来ている。

May one kind grave unite each hapless name,

And graft my love immortal on thy fame. (343—4)

死によって Eloisa の愛は完結し⁸⁾、心の安らぎも見い出せるのである。ただ、死という最終的な段階においても Eloisa は Abelard との愛を捨ててはいない。自分の道を自分で、自分の意志を生かしながら積極的に捜し求めているのである⁹⁾。

Ⅲ

The Rape of the Lock は Belinda の巻き毛の略奪を扱ったものである。Belinda を中心にその概要を述べてみたい。

この作品で Belinda は朝の睡眠の場面から登場する。眠っている時に Belinda は夢を見る。その夢は、Belinda が目を覚めた後 Canto IV の最後の時まで忘れられてしまうのだが、1日の暮れるまでにある恐ろしい事が Belinda の身に降り懸かるとい警告である。空精の Ariel が Belinda を支配する星の清澄な鏡の中にそのことを見る。Ariel はそれがどんな出来事なのか、どのようにして起こるのか、どこで起こるのかは言わない。ただ気を付けるように、特に男性には注意をするように夢の中で忠告するのみである。Belinda は目を覚ますと恋文に目を注ぎ、化粧にとりかかる。彼女は鏡に映る自分の姿に酔いながら衣服や宝石を身に着け、美しく自分自身を飾る。Belinda は自分を女神と同じ位置においている。身支度をしていく内に、彼女は気品を増し、最も美しい女性になっていく。

外出の支度を終えると、Belinda は船でテムズ川をハンプトン・コートへと向かう。Canto II では船上での Belinda の様子が描かれている。彼女はいつも微笑み、他人から憎しみを受けるような素振りはない。若者達の眼は Belinda に注がれ、Belinda は注目の的になる。Belinda の髪の毛は美しい2本の巻き毛に結われている。その巻き毛を賞賛している中の1人である冒険好きの Baron が、その素晴らしい巻き毛を見て、自分のものにしたいという欲望を持つ。Baron は Belinda の巻き毛を得たいと愛の神に祈る。Belinda はこの Baron の望みを知らない。

船はハンプトン・コートに着く。Belinda はそこで2人の騎士とオンバーを始める。その内の1人は Baron である。このトランプ遊びで Belinda は負けそうになるが、最後に切り札を使い、危ない所で勝利を収める。オンバーが終り、飲み物を飲みながら談笑している時、負けた Baron は自分の望みのもの

を手に入れようと Belinda の後から近付き、鋏で Belinda の巻き毛を1本切ってしまう。Belinda は恐怖の絶叫をあげ、狼狽する。Baron はその戦利品を自慢し、Belinda を余計興奮させる結果になる。

Canto IV で、Belinda は塞ぎ込み悲しみに沈む。憤怒、立腹、絶望が Belinda の心を満す。暫く打ち萎れている Belinda はその内に人間の怒り以上のもので燃え上がる。Baron はその時にも略奪した巻き毛を見せびらかし誇る。Belinda は涙にかきくれ、悲しみに沈み、自分の今日の行動を反省する。Belinda はここで朝の夢を思い出す。そしてそれを信じるのが遅すぎたと悔む。

Belinda の嘆き悲しむ声は Baron の耳に届かない。そこにいる人々は Belinda 側と Baron 側に別れて戦いになる。Canto V のこの戦いはたわいのないものである。束髪ピンやかぎたばこなどが武器になり、女性の視線や指が敵を押える。Belinda は自分の巻き毛を取り戻すことに専念し、Clarissa の言葉には耳をかさない。その戦いの決着がまだ着かない内に巻き毛が無くなってしまふ。巻き毛は神によって空高く飛ばされ、輝く星になってしまう。そしてその星は Belinda の死後も星々の真中に燦然と輝き Belinda の名前を刻みつけるのだからと Belinda を慰さめて終る。

この作品の主題は *Eloisa to Abelard* ほど深刻なものではない。作品に付加されている “The Argument” には「2, 3 の若い女性を楽しませる為」と書かれており、作品の prologue とも言うべき最初の数行には次のように書かれている。

What dire Offence from am'rous Causes springs,
 What mighty Contests rise from trivial Things,
 I sing—This Verse to *Caryll*, Muse! is due;
 This, ev'n *Belinda* may vouchsafe to view:
 Slight is the Subject, but not so the Praise,
 If She inspire, and He approve my Lays.

(I.1—6)

この作品で扱っているものは、Pope が述べているように大したことはない。

Baron が Belinda の巻き毛を切り取り，それにより生じた争いをどのように解決するかということである。作品には 4 大精霊等登場するが，Belinda を中心に考えてみたいと思う。

Belinda の愛はどのようなものなのか。この作品の事件は愛情がもとで起っていると描写されているけれども，前述の作品概要でも分かるように，Belinda の愛はあまり描写されていない。Belinda には Eloisa のように苦悩し，思い焦れる恋人はいない。Canto III において，Belinda を守護している Ariel が，Belinda の心の中に男性の面影を発見する。

Just in that instant, anxious *Ariel* sought
The close Recesses of the Virgin's Thought;
As on the Nosegay in her Breast reclin'd,
He watch'd th' Ideas rising in her Mind,
Sudden he view'd, in spite of all her Art,
An Earthly Lover lurking at her Heart. (III. 139—44)

この為，Ariel は仕方なく Belinda を守護する任務から離れるのだが，Pope はそれまで Belinda に特定の恋人がいるということを明確に描写していない。

心に秘めた恋人に対する Belinda の態度に切実なものは見られない。Belinda の恋はまだ熟したものではなく，恋を恋する所が見受けられる。恋文に目をやる Belinda には燃える心が強く起こらないし，Canto V で Belinda が Baron を組み伏せる時に Baron が訴える言葉に対しても Belinda の心は動かされない。Baron はその時，次のように言っている。

Boast not my Fall (he cry'd) insulting Foe!
Thou by some other shalt be laid as low.
Nor think, to die dejects my lofty Mind;
All that I dread, is leaving you behind!
Rather than so, ah let me still survive,
And burn in *Cupid's* Flames,—but burn alive. (V. 97—102)

生きて愛に身を燃やさせよ，と叫んでいるこの Baron の言葉に Belinda は「巻

き毛をかえせ」と大声で叫んで答えているばかりである。

オンバーをする時の Belinda も Baron と一緒にいて、同じ遊びをしたいということではない。Belinda がオンバーを始める動機は名声に対する憧れであり、その試合での勝利に心弾ませているのである。巻き毛が切られる時の Belinda は、天を引裂くほどの恐怖の絶叫を発している。そこには Baron との恋に生きる女性ほとんど感じられない。Belinda にとっては Baron よりも巻き毛の方が大切であり、略奪された巻き毛に執着して離れられない。

Belinda は一人の人間を愛し、その愛に生きるという所までは行っていない。Belinda は社交界で花形になり、話題の中心になることを望んでいるようである。若い男性のまなざしを受け、それに微笑みで答え、いつまでも崇め奉られる女神のような存在としていたいのだろう。1 人の人の愛に生きる女性にはまだなりきっていない。

巻き毛に対する Belinda の態度を見てみよう。略奪された巻き毛への執着は強いものである。それは一種の愛と言っても差し支えないであろう。巻き毛が切り取られることで Belinda は怒り、悲しむ。そしてそれを取り戻そうとして躍起になっている。ここには、Belinda の積極的な面と消極的な面が描写されている。

巻き毛が切られる寸前の Belinda はオンバーでの勝利に酔っている。予期せぬ出来事が起こり、Belinda の理性は無くなる。

Then flash'd the living Lightning from her Eyes,
And Screams of Horror rend th' affrighted Skies.
Not louder Shrieks to pitying Heav'n are cast,
When Husbands or when Lap-dogs breathe their last,
Or when rich *China* Vessels, fal'n from high,
In glittering Dust and painted Fragments lie!

(III. 155—60)

これは巻き毛が切り取られた直後の Belinda の反応である¹⁰⁾。彼女の両目からは強い電光が光り、憤怒、立腹が心を支配する。女性にとって髪の毛は大切なものであるが、人々のいる前でのこの Belinda の態度は、女性の慎しみを忘

れ、狼狽しすぎている。

Canto V の戦いの場面では、Belinda は Baron を相手に立ち向かう。荒れ狂う Belinda は Baron に飛びかかり、親指ともう一本の指で Baron を押え込んでしまう。Baron はかぎたばこを鼻に投げつけられくしゃみをしてしまう。最後の Belinda の武器は束髪ピンである。奪われた巻き毛を取り戻したいという切望に Belinda は女性としての嗜を忘れる。理性を失い、我を忘れて Baron に組みかかる Belinda の行動は、それにおいては積極的に立ち向かっており、この時の Belinda の考えには巻き毛奪還のことしかない。

オンバーをしている時の Belinda は勝負に夢中になっている。負けそうになる時の Belinda の顔からは血の気が引き、鉛のように青ざめ、迫りくる敗北を察して震えている。勝った時の Belinda は有頂点になり、歓喜の叫び声をあげる。すべてを忘れオンバーに熱中している Belinda はやはり積極的である。Belinda は名声に憧れてオンバーを始めるのであり、勝利を胸にオンバーをしているのである。名誉、名声を重んじている Belinda はオンバーで屈辱を受けるのに我慢出来ないものであり、これは巻き毛を取り戻そうと必死になっている Belinda の気持と通じるものである。

Belinda が熱中しているものはもう1つ見い出せる。それは Canto I における化粧の時である。身に着けるものは最上のものを選び外出の支度をする Belinda は、鏡に映る自分の姿を女神に見立て¹¹⁾、化粧台を祭壇と見なしている。Belinda は徐々に増して行く自分の魅力にうっとりとし、化粧に夢中になっている。1つのことに対して Belinda は熱中する所があるようだ。

そのような積極的に熱中する Belinda とは逆に、消極的な面も Belinda には見受けられる。奪われた巻き毛を嘆き悲しんでいる時である。Belinda の両目は半ば衰え、半ば涙にかきくれている。頭を下げ、ため息をついている Belinda には戦いの時に見せる勇敢さはない。ハンプトン・コートに来たことを悔み、人里離れた遠い所にいた方がよかったと嘆いている。朝の前兆を思い出すのもこの場面である。

'Twas this, the Morning Omens seem'd to tell;

Thrice from my trembling hand the *Patch-box* fell;
 The tott'ring *China* shook without a Wind,
 Nay, *Poll* sate mute, and *Shock* was most Unkind!
 A *Sylph* too warn'd me of the Threats of Fate,
 In mystic Visions, now believ'd too late! (IV.161-6)

自分のうわついた心を悔み、自分の行動を深く反省している Belinda には、理性の具わった優しい乙女の姿が感じられる。

しかし、この Belinda の態度は長く続かない。Canto V の Clarissa の言葉に Belinda は眉をひそめるのである。Belinda の心の中では、自分の感情とその場の雰囲気の方が勝っており、その両方に流されている¹²⁾。

作品の結末は巻き毛が星になってしまい Belinda 側と Baron 側の争いを治めるのだが、争いをしている者が誰も知らない内に巻き毛が無くなってしまふ。それは空高く飛んで行き、輝く星になる。つまり第3者、それも神の手がこの争いを静める為に介入している。主人公の Belinda さえ初めはそのことを知らない。そして、それによって Belinda 自身が満足するかどうかも描写されていない。ただ一方的に Belinda を慰めているのみである。

Then cease, bright Nymph! to mourn thy ravish'd Hair
 Which adds new Glory to the shining Sphere!
 Not all the Tresses that fair Head can boast
 Shall draw such Envy as the Lock you lost. (V.141-4)

略奪された巻き毛に執着している Belinda は、自分の力でそれを取り戻せない。その無念は Belinda にあるであろう。しかし、解決の手を差し延べてくれるのは神であり、神の前に Belinda は自己のすべてを投げ出しているのである。そして神は Belinda に名誉、名声を与えるのである。Belinda には無念が残ってもそれで満足だったろう。

IV

両作品は主題が各々異なっている為、そこから導き出されるものが違うのは当然である。しかしそれでも同じようなものが Eloisa と Belinda には見い出せる。

Eloisa も Belinda も共に 1 人の男性に恋する女性である。Eloisa の Abelard への思いは熱く強い。作品の中で、その愛は徐々に大きく膨らみ、官能的な、肉体的なものまで感じられる愛になっている。しかし Belinda の愛はそうではない。Belinda の胸の中にある “An Earthly Lover” はその愛における役割を Belinda の心の中でも、行動においてもほとんど果していない。それは未熟な恋であり、Eloisa の燃える愛までには進んでいない。Abelard との愛に向かって一途に走っている Eloisa のような愛は感じられない。

Eloisa は Abelard との愛の為には世俗的な名誉や富を少しも重視せず、ただ自分の愛だけを大切に求めているが、Belinda は、名誉や名声という世俗的なものに執着している。最後の結末において Belinda を慰める言葉は、Belinda の切られた巻き毛が輝く空に新しい名誉を付け加えるのだから、ということであり、他のどんな美しい髪の毛でもそのような羨望を得ることはない、と言って、Belinda を慰めているのである。オンバーの時の Belinda も名誉、名声を求め、化粧の時も人から注目の的で見られたいという世俗的な欲望が Belinda には感じられる。

Eloisa も Belinda も共に女性としての脆さがある。Eloisa は Abelard への愛を断ち切ろうとして神に救いを求め、Vestal の生き方を羨やむ。Abelard の平安を乱したくないと思い、Abelard に自分から遠く離れてくれるようにと頼んでいる。Belinda は自分の行動を反省し、外出しなければよかった、人の住まない小さな島にいた方がよかったと悔んでいる。しかし、それらは長く続かず、2 人ともその反省を生かしていない。Eloisa は Abelard と同じ墓に入りたいと望み、Belinda は巻き毛を奪還する為に戦いを始める。兩人とも自分達の欲望を捨て切れないのである。

Eloisa には女子修道院にいる修道女としての制約があり、そのことが Eloisa の苦悩を増すと共に Abelard への愛をより強くしていつている。しかし Belinda にはそのような心を束縛するものはない。Ariel が事件の予言を夢の中でしているが、それが Belinda の心に強く残り、Belinda の行動を抑制するものとはなっていない。

最後の結末を比べてみよう。Eloisa も Belinda も心の平静は得たようである。Eloisa は Abelard と同じ墓に入ることに幸せを感じ、Belinda は巻き毛が星になることに満足する。しかしそこに行き着く 2 人の態度は大きく異なる。Eloisa は自分の愛の解決策として死を考える。死ということで神の領域に入り永遠性を求める。神への愛か Abelard への愛か、という問題に Pope は明確な答を与えていないが、死という人間の力を超えたものによって結末をつけているのは確かである。Eloisa は神に任せているが、すべてをではない。Abelard と同じ墓に入って死後一緒にいたいという希望は Eloisa の最も大切な、神にも任せられないものである。

Belinda の場合もやはり人間の力を超えたものに結末を任せている。しかしこの場合は Belinda の意志ではない。Belinda が自分で慮考し、その末の結論ではなく、神が見兼ねて介入してきたのである。神が両作品の結末に大きな役割を演じているが、それに臨む Eloisa と Belinda の態度には能動と受動という違いがある。

V

Eloisa と Belinda に言えることは、思考や行動において女性としての脆さや消極的な面はあるが、全体として熱中する心、積極的な心があり、2 人の女性の描写においてはそれの方が勝っている。ただそれが Eloisa は Abelard への愛に対してだけであるのに、Belinda は複数のものに対して積極的になるように描写されている。そして、それに対する態度はそれぞれ大きく違う。Eloisa は自分の意志をはっきりと持ち、神に相對しながらも自分の愛を大切にし、悩

み苦しみながらその愛を貫き通そうとする女性である。それにひきかえ、Belinda の執着は名誉、名声に対してであり、作品の主題である巻き毛の略奪に対しては、それを自分の力で奪還することが出来なく、最終的に神の介入を全面的に認めることになる。Eloisa が死に至っても Abelard への愛を持ち続けたいと思っているのに対して、Belinda は神の前では自分の意志を貫き通すことが出来ない女性なのである。

注

- 1) Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope*, ed. John Butt (London: Methuen & Co. Ltd., 1968), p.252. 尚、以下この小論で引用する Pope の作品はすべてこの版による。
- 2) *OED* の Nature の項, 9 の b を参照。
- 3) David B. Morris, *Alexander Pope* (Cambridge: Harvard University Press, 1984), p.141. 女子修道院は Eloisa にとって心の葛藤の場所になっている, とある。
- 4) 心の葛藤を表わすのに Pope は 修辞法をうまく使っている。前掲書 Morris (p.134), そして Yasmine Gooneratne, *Alexander Pope* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976), p.61 でそれぞれふれている。
- 5) *Ibid.*, p.63; Gooneratne は “the agent of Hell” としている。
- 6) *Ibid.*, p.59 and p.64; Gooneratne も指摘しているように, 時には sexual な感じを与える描写さえもある。
- 7) Shakespeare の *Hamlet* の “Frailty, thy name is woman!” (I. ii. 146) を思い出させる。
- 8) Rebecca Price Parkin, *The Poetic Workmanship of Alexander Pope* (New York: Octagon Books, 1974), p.73. 死は Eloisa の心の葛藤の解決ではなく, それを終わらせているだけだ, とある。
- 9) Eloisa にとって女子修道院を去って Abelard の所へ行く訳にはいかない理由がある。Morris (前掲書, p.140) が言っているように Abelard のことを考えた為でもあろう。尚、歴史上の Eloisa と Abelard に関しては, Geoffrey Tillotson, “Appendix I” in *The Poems of Alexander Pope* (London: Methuen & Co. Ltd., 1972) を参照。
- 10) Gooneratne, *op. cit.*, p.42; “China jar” を “female chastity” とし, 磁器製品がこなごなになることを “fragility of female chastity” としている。
- 11) Hugo M. Reichard, “The Love Affair in Pope’s *The Rape of the Lock*”

in *The Rape of the Lock*, ed. John Dixon Hunt (London: Macmillan and Co. Ltd., 1968), p. 165 に Belinda は鏡の中の自分を女神としているとあり, Gooneratne は前掲書で “worship of her own ‘divine’ beauty” (p. 39) とし “She is the goddess everyone worships...” (p. 42) としている。

- 12) 『英米文学語学論叢』(桐原書店, 1984年)の中の拙論「*The Rape of the Lock*における優位と劣位の手法」を参照。